

# Bリーガー前野幹太 誕生秘話



## 千歳市初のプロバスケット選手

今年、プロバスケットボールチームの横浜ビー・コルセアーズに加入し、国内バスケの最高峰「Bリーグ」に挑む前野幹太。母校の泉沢小学校を舞台に、千歳生まれのバスケ少年がプロ選手になるまでをレポートする。 ※記事中において、前野選手の敬称略。

「チームにいてほしいタイプの選手。自分で言うのもなんですけど」

Maeno Kanta  
まえの かんた

横浜ビー・コルセアーズと2024-25シーズンの選手契約（特別指定選手／プロ契約）を締結し、千歳市出身の選手では初のBリーガーとなる。194cm、90kg。

【出身校・チーム】  
泉沢小／向陽台ミニバス  
→ 向陽台中  
→ 東海大札幌高  
→ 東海大  
→ 横浜ビー・コルセアーズ

「結局最後にシュートを決めるのは幹太」

前野がバスケットボールを始めたのは小学校2年生のとき。近所に住む先輩の誘いを断り切れず、千歳向陽台ミニバスケットボール少年団に入団した。小学生だった前野を指導したのが、当時、向陽台ミニバスのコーチを務めていた細越俊明氏だ。前野は振り返る。「怖かったですね。背も高いし、厳しかったです。細越コーチが冗談を言っても、普段が怖すぎで笑うどころじゃなかったんですよ」

細越氏は、前野にバスケットボールの基礎を叩き込んだ。もともと上背があり、飲み込みも早かった前野は、瞬く間にエースへと成長していく。試合になれば、チームの得点の大半を一人で取ることも珍しくなかった。幼少期の彼がどれほど飛び抜けた存在であったかは、かつてのチームメイトの言葉によく表れている。

「バスケットセンスが頭一つ抜けているし、結局最後にシュートを決めるのは幹太なんだなって感じます。チームのメンバー全員がそう思っていましたよ」（松田時来さん）



全国大会に3回出場し、優勝経験もある向陽台ミニバスで幼少期を過ごした。泉沢小には、今も当時の写真が飾ってある。

その一方で、こんな一面もあった。「1対1で守るところで、守っていなかったんだよ。だからディフェンスをもっと頑張れと口酸っぱく言った。オフenseは上手だったよ。ディフェンスできないわけじゃないのに、しなかったんだ。今でこそ、幹太のディフェンスは高い評価を受けているけど、当時

は相手と接触するのがあまり好きじゃなかったみたいだね」（細越氏）  
向陽台中学校に進学すると、1年生でいきなり北海道選抜チームに選ばれた。ケガで試合に出られない期間もあったが、出場すれば圧倒的な結果を残す。ミニバス時代よりも周りのレベルが上がリ、味方を活かすためにパスを選択するシーンが増えたものの、絶対的な得点源であることに変わりはなかった。3年時の中体連では、向陽台中を石狩管内大会優勝に導き、全道大会出場を果たした。このとき、すでに身長は190cmを超えていた。

監督から言い渡された衝撃的な「パス禁止」

中学卒業後、道内屈指の強豪校、東海大学付属札幌高等学校に進学した。そこで前野に転機が訪れる。東海大札幌高男子バスケット部の佐々木睦己監督から、なんと「パス禁止」を言い渡されたのだ。

「入学早々、『ギリギリまでとにかくシュートを狙え。全部お前が行け』と言われて。パスしたらすごく怒られました。自分の成長という面からは、パスを散らしているのが監督にはネガティブに見えたんじゃないかと思いま

すし、自分のことを考えて言ってくれていたと思います」

必然的に、自らリングに向かってアタックする機会が増え、不得手だった接触プレーも克服した。ゴール下で強さを発揮するようになった前野は、1年生のときから頭角を現し、2年生になる頃にはスタメンを確保した。身体を張り、チームが勝つために必要な仕事をする姿勢の土台が、この頃に形成された。

バスケットボール人生で最も悔しかった瞬間

2021年春、前野は東海大学に進学する。「シーガルズ」の愛称で知られるこのチームは、竹内譲次、田中大貴ら日本代表選手を多

数輩出している名門中の名門だ。前野の同期にもハーバー・ジャン・ローレンス・ジュニア（サンロッカーズ渋谷に加入）など、多くのタレントがいた。前野はここでレベルの高いバスケットに触れ、さらにプレーの幅を広げていった。あまり得意ではなかったという3Pシュートの技術を磨き、自らの武器とした。「高校時代はインサイド中心だったから、3Pシュートを打つ機会は多くなかったです。大学で身につけた技術ですが、それはバスケのレベルが上がったため身につける必要ができたから。最近ではバスケそのものが、3Pシュート主体になってきていますから」

悔しい思いも味わった。昨年冬に開催された第76回全日本大学バスケットボール選手権大会（インカレ）でのことだ。4年生の前野にとっては最後のインカレだったが、決勝戦で日本大学に敗れた。前野自身はチーム最多の7リバウンドと奮闘したが、特に序盤は劣勢を強いられ、前半終了時点で日大に19点差をつけられていた。

「個人がどうこうよりも、チームとして気持ちの面で負けていたと思います。序盤から相手に走られて、（巻き返しは）一つずつという話はしていましたが」

しかし、このまま終わらないのが東海大というチームだ。



泉沢小の体育館でバスケットボールをする前野を撮影。前野が母校を訪れたのは、およそ10年ぶりのこと。



フリースローを打つ前野。そのシュートフォームは、ボールが放たれた瞬間に「決まる」と確信するほど美しい。

コーチ&チームメイトの  
前野選手評



向陽台ミニバスの  
コーチ（当時）  
細越俊明 さん

「入団したときから背が高く、目立つ子だったね。目立つからこそ、サボっている姿を目にすると厳しく言った記憶がある。賢い子だったし、理解力もあったからどんどん成長していくんだけど、ただ一つ、幹太が主力選手になったときに、ディフェンスをしないとゲキったことがあるんだ。接触が嫌だからディフェンスも好きじゃないのかなと思っていたけど、俺から離れた後でいい指導者と出会って、ディフェンスの大切さを学んで覚悟したんだと思うよ。幹太の試合をテレビで見たとき、留学生とゴリゴリにマッチアップしててね。それを見て俺、涙したんだよ。こんなにディフェンス頑張るようになったのか、ってね」



向陽台ミニバス・向陽台中  
のチームメイト  
松田時来 さん

「幹太は常にチームの中心で、特にミニバスではボール運びから得点まですべて一人で完結してしまうような選手でした。高校時代に別のチームで対戦したとき、オールラウンドなイメージのあった彼が、ゴール下で泥くさくプレーしている姿を見て驚きました。インサイドでの強さを身につけて、さらに完璧な選手になったのだと思います。幹太とは昔からの「悪友」で、一緒に自転車で支笏湖に行くなど思い出がたくさんあります。本音を言うと北海道に帰ってきてプレーしてほしい思いもありますが、ビーコルではチームを勝たせられるような、頼られる選手になってもらいたいです」



10年前までホームコートだった  
泉沢小の体育館。入った瞬間に、  
思わず一言、「懐かしい」。



ドリブルも披露してくれた。ボールを奪うのが至難の業だと思わせるドリブルだった。

**バスケ少年・バスケ少女へ  
前野選手からメッセージ**  
「バスケを好きになって、努力を貫き通したからこそ、こうしてプロ選手になれました。好きなことを仕事にできるのは幸せだと思うので、それを目指してみんなにも頑張ってもらいたいです」

こうしてプロの世界に足を踏み入れた前野。すでにチームに合流し、練習にも参加している。  
「東海大は、バスケットに対する考え方が大学の中でもプロ寄りだと思いますが、それでもやはりプロの方が頭を使いますし、フィジカル面ももっと激しい。大学みたいなのがむしろな面もあるけど、良い意味でずる賢いバスケット

プロの世界でも活躍を誓う  
「Bリーガー前野幹太」

とはいえ、大学での4年間は前野に多くの



撮影の準備でバスケットシューズを履く前野。左足から靴ひもを結ぶのがルーティンだと話す。

「東海大での合言葉で、シーガルズタイムとあって最後に絶対、自分たちの時間が来る。そうして少しずつ追いついていきましたが、及びませんでした」  
最終スコアは、63-70。第3、第4クォーターで猛反撃し、一時は3点差まで追いつけたが、前半の大差が響いた。前野はこの敗戦を、バスケットボール人生で最も悔しい瞬間だったと振り返っている。

真にオールラウンドな  
選手へと飛躍

をするというのか、プロの方がやることでやるとい印象です」  
今シーズン、ビーコルでは、ヘッドコーチ（監督）にラッシュ・トゥオビ氏が就任している。フィンランド人指揮官が掲げているのは、常にボールと人が連動する「コレクティブバスケットボール」だ。

「この理念をまずは理解して、一日でも早くチームにフィットしたいです。ディフェンス面では、小さくて速い選手でも大柄な外国人選手でも、誰とマッチアップしても相手からアドバンテージと思われずに守り切ることを。」

ものをもたらした。3Pシュートを身につけたことでプレーエリアが広がり、インカレをはじめとする大会では、屈強な外国人留学生とゴール下で火花を散らした。かつて対戦相手との接触を嫌ったエースは、真の意味での

「ビーコルで頼られる存在に」

オールラウンダー、そしてチームプレーヤーへと変貌していた。

「東海大は選手がそれぞれ個性を持っているし力もあるので、まとめ役としてのリーダーシップを、特に4年生になってからは意識していました」

その言葉に見え隠れするのは、「点を取れる選手なら自分以外にもいる。俺はチームの勝利のためにできることをやる」という利他的なマインドだ。

「今は自分がたくさん点を取るわけではないけど、周りをうまく活かすというのか、味方につないだりして乗せてあげるのが好きですね。チームにいてほしいタイプの選手。自分で言うのもなんですけど」

トゥオビヘッドコーチからはそういう役割を求められていると思います」  
プロに進めば、今よりもさらにバスケットのレベルが上がる。それでも前野は、ビーコルでのポジション確保に自信をのぞかせる。

前野にとって、プロ入りはあくまで通過点。所属チームが変わるたびに新しい役割をこなして、どんなときでもチームの中心であり続けたい。向上心の塊のような男が、ここで満足するはずがない。恩師、細越氏は前野の今後に期待を込めてこう話す。

「日の丸を背負ってほしいんです。幹太なら日本代表になれると思うから、それを目標にしてほしい」

前野も「プロになって終わりじゃないし、試合に出てビーコルで頼られる存在に成長していけば代表になれるチャンスはあると思うので、頑張りたい」と応じる。  
最後に「応援してくれる人たちの期待に応えて、活躍している姿を早く見せたい」と意気込みを語った前野。Bリーグという最高峰の舞台でその姿を見られる日は、すぐ近くまで来ている。

プロの証であるビーコルのユニフォームに身を包んだ前野。背番号「10」は、ミニバス時代にも着けた愛着のあるナンバーだ。

写真提供：横浜ビー・コルセアーズ



そんな前野がBリーガーになるのに、それほど時間はかからなかった。最後のインカレが始まる直前のことだ。東海大の陸川章監督を通じて、横浜ビー・コルセアーズが前野に声をかけた。

「ホッとする感じでした。進路についての不安もあったので、めちゃくちゃうれしいというよりは、とりあえず一安心という気持ちが大きかったです」  
インカレに集中するため、大会が終わるまでは家族との連絡も絶っていたという前野。大会後、応援に来ていた両親に、ビーコルの一員になることを報告した。これまで前野を育て、見守ってくれた二人への、何よりの親孝行だろう。

